NEWS FROM ZION
シオンとの架け橋ニュースレター　第 32 号　2011 年 12 月（年 4 回発行）

הפורום המשיחי האסייתי
Asia Messianic Forum
アジア・メシアニック・フォーラム2011

再臨を実現する祈りと働き

聖書研究会　村岡　丈夫

大阪大会で語る
村岡丈夫師

アジア・メシアニック・フォーラム 2011 と言う大きな集会を、主の導きとあわれみの内に無事おえられた事を感謝しているところです。今回は、日韓の共催が実現しました。

イスラエルのメシアニック・ジューと日本の教会をつなぐ事が私たちの使命であると考えており、回を重ねるごとにその感を深めています。今回のあいさつで申し上げたのですが、戦前のあの厳しい時代に聖霊の導きによりホーリネス教団の中田重治師が「イスラエルの回復のために祈れ」と命じてから約 80 年のちの今、私たちはその祈りと預言の成就の証人となっています。イスラエルの建国とイエス・キリストを信じるユダヤ人の出現と言う、神が生きておられ、約束をまもられる証拠が示されている驚くべき時代に私たちは生きています。この 2000 年間に、まことに悲しむべきキリスト教会とユダヤ人の歴史がありました。これは、どちらか一方に全ての責任があるのではなく、共にかたくなの霊に閉じ込められまことの神から離れていた事の結果と考えるべきです。そして、ユダヤ人の兄弟たちはホロコーストと言う未曽有の犠牲を払いました。そして今、私たちはその重い扉が開かれ、壁が崩れて行く様を見ています。

私たちはその中田重治師の流れを受け継ぐ単立の教会で、イスラエルのための祷告（力を込めた祈り）と彼らの一致のために働いてきました。師も日本民族は黙示録 7 章の生ける神の印を持つ天使であり、その使命を果たすべきだと教えられました。この天使にはイスラエル十四万四千の額にこの印を押すと言う大きな使命があるのです。そして、14 章に進むとこの人々が小羊と共にシオンの丘に立つと書かれています。つまり、イスラエルの救いとキリストの再臨は、切り離す事が出来ない一連の出来事なのです。

メシアニック・ジューが現れ、成長している事は、今、終りの日が近づいてきている事を示しています。イスラエルはまだ十四万四千という数義で示される民族的な完成にふさわしい状態ではありませんが、歩みが進んでいる事は間違いありません。ここは一気に突破するチャンスであり、キリストの御心もここにあるのです。

多くのクリスチャンが自分の救いだけを求めているのは、聖書の立場から見れば必ずしも正しいとは言えません。聖書の中心的テーマはアブラハムの約束と言う神の遠大な計画であり、人の魂にはその祝福を待ち望む期待と希望が刻まれています。その祝福とは個人だけでなく、地球規模での祝福、救いの完成なのです。人の命は個人が独立したものでは無く、宇宙の命、絶対的な命である生ける神ご自身につながっているからです。このような私たちの命と存在の根源である神について、イスラエルの兄弟たちと一つになって話し合える時代が来ています。

聖書はユダヤ人と異邦人をはっきり分けて取り扱っていますが、これは差別ではなく区別です。人間が平等であると考える方には理解しにくいかも知れませんが、ユダヤ人と異邦人はなすべき役割が違うのです。パウロはロマ書 9 章で同胞のためならこの身が呪われても良いと、極端とも言える思いを述べていますが、私もユダヤ人に対して同じ気持ちを持っています。

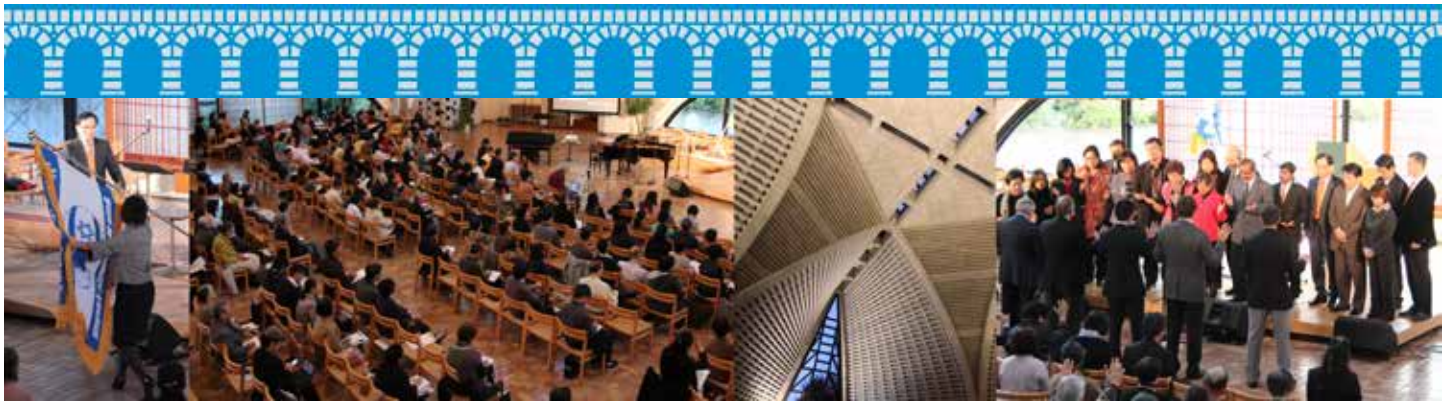
以前に、高齢の集会員の見舞いに行った時、彼女は「私はもう何の働きもできず、祈ることしかできません。」と言われたので、「祈りが力のある働きです。あなたの祈りに支えられて、私たちは働く事ができるのです。」と答えました。どうか皆さんもこの祈りにご参加ください。また、共に働いてください。

もし、私たちの存在を説明し、進むべき方向を示してくれる聖書が無ければ私たちの人生は闇です。私たちはキリストが私たちの中で生きていると言う素晴らしい命の実体をあたえられ、この事を人類の長子イスラエルと共有すると言う大きな目標を示されています。この恵みの感謝と賛美をささげながら、力の限り祈り、働いていこうではありませんか。

公開セミナー
パレスチナ宣教の最前線から

12 ページの記事のように、パレスチナのクリスチャンは厳しい状況にあります。その状況を直接聞いていただくために、ナイム・コーリー師をお招きします。中東の真の平和のために神とユダヤ人の永遠の契約をどう理解すべきなのか、またユダヤ人とクリスチャンの関係はどうあるべきなのかを学びましょう。

講師：**ナイム・コーリー博士**
ファーストバプテスト教会（ベツレヘム）
主任牧師
大阪：2012 年**2**月**1**日（水）**6:30-8:45**
大阪クリスチャンセンター 301 号室
東京：2012 年**2**月**3**日（金）**6:30-8:30**
お茶の水クリスチャンセンター 411 号室
シオンとの架け橋　TEL 078-341-7501



アジア・メシアニック・フォーラム 2011 を終えて

日本・準備委員長　石井田直二

多くの皆様のご協力を得て、無事にアジア・メシアニック・フォーラム（AMF）2011 を終えることができました。神の導きと守りにより、大任を果たせたことを感謝しています。貴重な時間を割いて会場にお集まりいただいた皆様に、深く御礼申し上げます。

過去の経緯から、なかなか一致できない韓国と日本がAMFのために一致協力できたことは、とても良い証となりました。特に、この分野では大先輩である尾山令仁先生が東京とソウルで和解について語って下さり、心から感謝しています。

■アジアにおける日本

今回の大会には、日本を含めアジアの 7 カ国からイスラエルに関するビジョンを共有する指導者が集まりました。キリスト教が長い歴史を持つ国では「置換神学」がしっかりと根付き、イスラエルの重要性がなかなか理解できないのですが、最近になって福音を受け入れた国では、とてもストレートに頭に入るようです。

しかし、一見するとリバイバルの波に乗り遅れているかのような日本にも、アジアにおいて果すべき役割があることが見えて来ました。日本は、80 年も前からイスラエル回復の祈りが続けられた国であり、イスラエル関連のクリスチャン団体も 10 年以上にわたり活動して来ました。この間に学んだ貴重な教訓は、他国と共有して行くべきものです。

今回、アジアの代表たちが集まり食事をしていると、韓国の方が「アリラン」は古代ヘブライ語だという説を笑いながら紹介されました。すると、他の国々の人々も「うちにも、その手の話がある…」と言い出したのです。この種の主張が「イスラエル回復」と混線して出現するのは、特定の国の問題ではないことが印象的でした。

「異邦人もユダヤ人と同様にトーラーを守るべきだ」という主張も同じで、ユダヤ人を愛するあまり自分もユダヤ人になろうとするクリスチャンが続々とアジア各国で出現しています。

日本の私たちは、すでに同種の問題に遭遇していますので、その情報は他の国々に役立ちます。また、地道な仕事を計画通りにしっかり仕上げる日本人の国民性も、アジアのために用いるなら大きな祝福となるでしょう。

■バランスの重要性

イスラエルについて学ぶ際に重要なのは「バランス感覚」です。この運動の開拓者たちは、常識を打破するために極端な主張を展開する必要がありましたが、現在ではむしろバランスが重要になっています。

メシアニック運動の中にも様々な主張がありますが、それぞれの良い点を学びつつ「センターライン」を意識しておく必要があります。ですから、立場が異なる複数の講師から一度にメッセージを聞けるAMFの形式はとても有益です。

AMF に今回お招きした 4 人の講師は、かなり背景が異なる方々なので、同席してお互いにじっくりメッセージを聞く機会があまり無いため「他の講師の話を聞けて良かった」と喜んでおられました。AMFはイスラエルでの相互理解を深めるためにも役立ったようです。

■今後に向けて

次回のシンガポール大会は 2013 年。そして、次の 2015 年は、すでに複数の国が開催地として名乗りを上げています。今後、AMFはイスラエルを愛するアジアのクリスチャンを一つに結び、再臨のために主の道を備える重要な役割を果して行くことでしょう。

神は日本の私たちに、最初にこの幻を見せて下さいましたが、アジア各地の兄弟にも同じ幻を見せておられます。福音が異邦人に伝えられた時、神はコルネリオとペテロに同時に幻をお見せになりました。福音がイスラエルに帰りつつある今も、神はアジアの多くの人々に同じ幻を見せておられるのです。

名古屋、大阪、仙台、東京、ソウルを回ったAMFの大会旗が、さらにアジア各地を回り、エルサレムで再臨の主を迎える日まで、アジアの兄弟と共に働こうではありませんか！

アジア・メシアニック・フォーラム 2011 の記録

日程と会場　大阪 11 月 19 日 大阪クリスチャンセンター
東京　21 − 23 日 ウェスレアン・ホーリネス淀橋教会
ソウル 24 − 26 日 韓国教会 100 周年記念館
※講師と賛美奉仕はプログラム順に掲載させていただきました。

イスラエルからの講師　ピーター・ツカヒラ師
アキバ・コーヘン師 / エイタン・シシコフ師
ヨセフ・シュラム師 / アビ・シシコフさん

日本からの講師　村岡丈夫師 / チャールズ・クリンゲンスミス師
行澤一人師 / 村岡大輔師 / 尾山令仁師 / 五十嵐義隆師
田中時雄師 / 奥山実師

参加国　インド / 香港 / シンガポール / 台湾 / フィリピン
主催国と団体　日本（シオンとの架け橋）/ 韓国（IMN）
讃美奉仕　チャーチ・オブ・プレイズ・インターナショナル
京都グローリーチャーチ /Aglow International Tokyo
ジーザス・スピリット生田教会 / 具志堅ファミリー / 植木朋子姉
登戸エクレシアキリスト教会 / 早川衛師・高矢研治兄 / ソ・ドンスク師
特別賛美　久米さゆり
開催協力団体　127（詳細は http://www.am-forum.jp/）
来場者数（資料配布数より算出）大阪：320 名　東京：800 名
当日の献金　1,573,501 円

イスラエルの預言的意義

大阪午後

ピーター・ツカヒラ（カルメル・アセンブリー）

野蒜（のびる）海岸に立つ
ピーター・ツカヒラ師

■預言とはどんなものか

初めに、預言とはどのようなものかという基本的なことから話します。私が述べる預言とは、大文字のP（Prophecy）から始まる預言です。聖書の中で何が起こるのかが記され、歴史において成就した事柄を指します。その代表例がイエスの受肉降臨です。マタイの福音書では14回「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった」と書かれています。

預言の成就の具体例として、ルカ伝4章を挙げます。その16節に、イエスがナザレの会堂で説教をされたことが書かれています。イエスは30歳頃まで、普通の人としてナザレで育ち、その後公生涯を送られたのですが、当時の人々は「イエスとは誰なのか」と、彼の噂で持ちきりだったことでしょう。ナザレの会堂に大勢の人が来たことは想像できます。そしてイエスがイザヤ書61章を開いて「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」と語られたとき、聴衆は恵みの言葉に驚いたのです。

■メシア＝油注がれた者

ルカ伝4章18節をヘブライ語で理解すると、イエスの御心が一層明白になります。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が…わたしに油をそそがれたのだから」。この聖句の後半部分のヘブライ語は「アドナイ・アライ・ヤアン・マシャハ・オティー」です。「マシャハ」とは、メシアとつながった言葉で、説教を聞いていたユダヤ人には、それがメシアの預言であることは明らかでした。従ってその部分を「主は、わたしをメシアとされた」と、読むことが可能なのです。

ところで、彼らはイエスの言葉に同意したでしょうか。イエスはその後の聖句で、ユダヤ人の預言者が異邦人のところに行った例を二つ挙げましたが、聴衆にはそれが気に入りませんでした。むしろ、イエスを殺そうとまで考えたのです。目の前にメシアを見ながら、何故分からなかったのでしょう。彼らには、聖書に記された御言葉が「成就している」事実を目の当たりにした時、それを正しく理解するための「啓示」が欠けていたのです。啓示が無かったが故に、彼らの時代に起こった偉大な出来事を見逃す結果となったのです。

■イスラエル帰還の預言

イスラエルはこの64年間、毎日のように報道で取り上げられています。日本の多くの人々は「大きな問題を引き起こす小さな国」と考えています。そして世界の人々は「イスラエルの味方になるか、敵になるか」という選択を迫られています。私は、日本のクリスチャンがイスラエルの課題を理解する啓示が与えられることを願っています。

エゼキエル36章に、イスラエルが国として戻ってくるとあります。「わたしが事を行なうのは、あなたがたのためではない。あなたがたが行った諸国の民の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名のためである。わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。」（エゼキエル36:22-23）

ここから2つの事が読み取れます。一つは、神がイスラエルに偉大なことを成し、それを全世界が知るようになること、いま一つは、それが起こる時に、諸国の民が祝福を受けることです。イスラエルが帰還したのは彼らが何か他の国より優れていたからではありません。

神はご自身の御名のため、また神が誰であるかを知らせるために、それをすると語っておられるのです。24節には「わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く」とあります。よほどの神学者でなければこの節を歪めて、違う意味には解釈できません。イスラエルの帰還は予め告げられていたのです。

■契約を守る忠実な神

神は「わたしは契約を守る忠実な神である」ことを示そうとしています。さて、契約はなぜ重要なのでしょうか。それは私たちクリスチャンも、同じ神から契約を受けているからです。私たちが聖餐式を行うのは、その契約を更新する意味を持っています。人は口でイエスを主と告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら救われるという言葉通り、イスラエルに対して契約を守られる神がおられることがわかるのです。

さて、エゼキエル36章23節には、神の御名が彼らの散らされた諸国の民の間で汚されたとあります。これはなぜでしょう。それは諸国の民に「これが神の民なのか、土地も国も無く、どこでも迫害されているじゃないか」と言われたからです。しかし神は約束を守られる方です。皆さんが現実に見ている通り、イスラエルを帰還させたのです。

■日本の覚醒

預言が目の前で成就しているのを、私たちは見ています。しかし、啓示の霊によって心の目が開かれる必要があります。ユダヤ人の地であるイスラエルに行けば、メシアニック・コングリゲーションでヘブライ語による礼拝をするユダヤ人を見る事ができる時代に私たちはいます。

まさに神は、このイスラエルを通して私たちに語りかけておられます。私は、日本で大きな覚醒が起きると信じています。そのために、イスラエルというテーマが鍵となることでしょう。そしてこの波に乗れる個人や団体は繁栄し、それに乗り損ねた人たちは衰退していくことでしょう。

AMF 2011 DVD発売のご案内

現在、アジア・メシアニック・フォーラム2011を記録したＤＶＤの編集作業が進んでいます。完成しましたら、イスラエルニュース広告特集号や次号のニュースレター、ホームページ（www.zion-jpn.or.jp）等でお知らせします。

ご期待下さい。

マタイの福音書と新しいひとりの人 大阪午後・東京２日目夜

アキバ・コーヘン（ゲシェル・フォーラム）

※書名の無い引用箇所は全てマタイの福音書です。

マタイの福音書はユダヤ人のために書かれているため、その文脈の中で異邦人が問題にされるのは復活後であると一般に考えられていますが、詳しく見て行くと全体を貫いて異邦人が重視されている事がわかります。

■イェシュア＝イスラエルにつかわされたダビデの子

アキバ・コーヘン博士
ソウル大会のアロシの祝祷

マタイの福音書はイエス・キリストの系図から始まっていますが、その中で鍵となる人物はダビデです。その冒頭に、イエス・キリストは「ダビデの子」である事が明記されており、続いてマタイは、アブラハムからイエスまでの系図をダビデの家の創立（1:1-6）、衰退（7-11）、回復（12-16）に分けて、17 節で各々が 14 代であると記しています。

14 という数字は何を意味するのでしょうか？ ヘブライ語の文字は数字でもあり、ダビデと言う名前を構成する文字を数字と考えるとその合計は 14 になります。さらに、この系図にはダビデの名前だけが 5 回もあらわれ、この中には他にも多くの王がいるにもかかわらず、彼だけが 6 節で「王」と書かれているのです。

これらの点から、マタイはダビデがイスラエルの歴史を理解する鍵であり、その「子」であるイェシュア（イエス）がイスラエル歴史の頂点であると考えていた事がわかります。

イェシュアは、律法に従うユダヤ人としてもイスラエルにつかわされました。イェシュアは、5:17 で律法の重要性、そして 19 で律法を守るように教える事の重要性を説いています。そして、自分がイスラエルにつかわされている事を 15:24 で明言し、使徒たちも「イスラエルの家の失われた羊」（10:6）につかわしています。

■イェシュア＝諸国民に宣言されたアブラハムの子

ここまで見てくると、マタイ伝のイェシュアは復活まで異邦人とは関係が無かったように見えますが、そうではありません。その鍵も、冒頭の系図に隠されています。

マタイはイェシュアが「ダビデの子」であるとともに「アブラハムの子」であると書いています。創世記 12:3 を見れば、アブラハムが異邦人を祝福するために選ばれた事がわかります。

もう 1 つのヒントが、系図の中に隠されています。この系図には 4 人の女性が現れますが、その全員が異邦人か異邦人に嫁いだ女性です。6 節の「ウリヤの妻」はバテシバですが、バテシバはユダヤ人だったのではないかと思われます。そこでマタイは異邦人との関連を強調するために異邦人である事が明らかなウリヤの名前を使って「ウリヤの妻」と書いたと考えられます。

そして、マタイによれば最初にイェシュアを礼拝したのは、異邦人である東方の博士たち（2:1）でした。そしてこれは、詩編 72:10 やイザヤ 60:6 の成就とも言える出来事だったのです。

■イスラエルへのレッスンとしての異邦人の信仰

娘の病気を癒してもらおうとした異邦人の女へのイェシュアの答えは冷たいものでした。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません。」(15:24)「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」（26）

ところが、イェシュアがイスラエルを最優先にしている事を知っていたこの女の答えは驚くべきものでした。自分たちが「犬」であることを認めたのです。イェシュアはその信仰をほめ、娘を癒しました。

8 章に書かれている百人隊長の時にも、イェシュアはその信仰を賞賛し、しもべは癒されました。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことがありません。」(8:10)

このように、マタイは異邦人の信仰からユダヤ人は学ぶべきだと考えていたのです。

最後の晩餐の時に、イェシュアは杯を取って「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」(26:28) と言いました。この「多くの人」は、イスラエルと異邦人を指すと私は考えています。そして、8:11 では、「東から」つまり日本や韓国、アジアの民族もメシアの晩餐に招かれる場面が描かれています。

■異邦人とユダヤ人の共通の目標

当初は弟子たちにイスラエルだけに伝道する事を命じていたイェシュアが、24:14 では諸国民への伝道が重要であることを預言し、復活後の 28:19 で「あらゆる国の人々」に伝道するように弟子たちに命令します。

そしてパウロはガラテヤ書 2:8 で、ユダヤ人の使徒ペテロと異邦人の使徒である自分に同じみわざが働いている事を証しています。イスラエルと、異邦人であるアジアの皆さんは福音のための同労者なのです。

マタイの福音書はユダヤ人を重視しているように見えますが、異邦人をも意識した構成であることを学びました。この学びをとおして、イスラエルと異邦人は一つの目標を実現するために、共に重要な使命を持っており、「新しいひとりの人」としてこの目標を実現する事を求められているのを理解いただけたと思います。そして、その目標は、その新しいひとりの人を通して神の栄光があらわされる事です。（マラキ 1:11）

最後にイザヤの預言を読みたいと思います。「東の国々」とは、アジアの諸国の事だと私は考えています。

> それゆえ、東の国々で主をあがめ、西の島々で、
> イスラエルの神、主の御名をあがめよ。(24:15)

今こそアジアとイスラエルが一つになって、神の栄光をあらわそうではありませんか。

失われた兄弟の帰還

大阪午後・東京１日目夜

エイタン・シシコフ（恵みの天幕）

■放蕩息子のたとえ

東京大会分科会での
エイタン・シシコフ師

私はアメリカのカリフォルニアに生まれ、十代に反抗期を迎え、家を飛び出しました。そして電気もない山岳地帯に移り住みました。しかし、私の生活は親しい友人が殺害されたことによって一変しました。私は人生の目的を失い、放蕩息子のようになったのです。しかし神は、イェシュアを通して私を連れ戻し、ユダヤ人としてのアイデンティティーに立ち帰るようにしてくださったのです。

さて、ルカ伝 15 章の放蕩息子のたとえでは、兄をユダヤ人として、弟をキリスト教会として語られることがよくありますが、皆さんにはその解釈を一旦横に置いていただきたいと思います。ルカ伝 15 章の文脈では、失われた羊の話、失われた銀貨、失われた息子について書かれています。私は失われた羊と聞けば、エゼキエル 34 章を思い浮かべます。その 11 節には「わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする」とあります。これは失われたイスラエルの家のことであり、放蕩した弟の姿を思い起こさせます。実にこのたとえは「失われた羊であるユダヤ人を、教会がどのように受入れるか」という点について語っています。その意味で、このたとえは伝道的なメッセージであり、預言的なメッセージでもあるのです。

■弟の帰還

弟はやがて父の元に帰る決心をしました。天と父に対して、罪を犯したことを理解したのです。皆さん、このように父なる神に立ち帰ることこそ、救いではないでしょうか。私たちは神に立ち帰り、神と共に歩むべきです。

私たち（失われた羊であるユダヤ人）が父なる神の元に戻る時、それは非常にドラマチックな出来事になります。弟は神から離れていましたが、父なる神の心から離れていたわけではありませんでした。父は毎日、今か、今かと弟の帰りを待っていました。私にも４人の子どもがいますが、私の息子のアビが日本を訪問していた時、イスラエルにいる私たちの家族は、ひとりが欠けていることを全員が心に留めていたのです。

■父の態度

放蕩息子が帰ってきた時、父は彼を叱ったり罰したりしたでしょうか。むしろ帰ってきた息子を抱き寄せ、口づけをしたのです。これはイスラエルが、ディアスポラ（離散）の状態にあった時と似た状況です。たとえイスラエルが遠く離れていても、申命記 30 章、エレミヤ 30 章、さらにエゼキエル書は、神が必ずイスラエルを帰らせると語っているのです。

ユダヤ人はさまざまな伝統やアイデンティティーを守ってきましたが、新約の恵みには長らく入っていませんでした。その意味で私たちユダヤ人は、まさに放蕩息子のような状態なのです。父にとって、死んでいた息子が生き返り、いなくなっていたのが見つかったように、私たちはこの通り、父のもとに帰ってきているのです！

この事実は、エゼキエル 37 章の枯れた骨の聖句を思い起こさせます。そこに登場する枯れた骨は「イスラエルの失われた家」とあります。神はイェシュアを通して、私たちを生き返らせてくださったのです。

■教会の態度

兄の態度はどうだったのでしょうか。弟が帰ってきたので、祝宴の準備をしていると聞くと、兄は怒ってしまいました。事実兄は、父から求められていたことを形の上ではしっかりと守っていたのです。

歴史を見るとき、キリスト教会もこれと同じ態度ではなかったでしょうか。大聖堂を建て、正しい式服を着て「私たちに同意しないユダヤ人を、迫害しました」と、その正しさを主張したのです。しかしローマ書 11 章を読むとき、取るべき正しい態度が分かります。パウロは、根であるユダヤ人に対して誇ってはならない、根があなたたちをささえているのだ、と述べています（ローマ 11:18）。

そしてユダヤ人が帰って来たときに、何が起こるかが書かれているのです。「もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることでなくて何でしょう」（ローマ 11:15）これはリバイバルです！ 皆さんも勿論リバイバルを求めておられるでしょう。イザヤ 60 章には、異邦人がどのようにイスラエルのリバイバルにあずかるかが書かれているのです。

■もうひとつのエンディング

ねたみ深い兄が憐れみ深く、正しい兄弟であったとすればどうでしょうか。イザヤ 60 章によるとその正しい兄弟は何をするでしょう。「外国人もあなたの城壁を建て直し……」（イザヤ 60:10）の御言葉通り、異邦人の正しい兄弟はイスラエルの帰還を助け、財政的にも援助をすることでしょう。また反ユダヤ主義から決別することでしょう。

兄が父と共に、弟の帰りを待っていたとすれば、どのようになっていたでしょう。異邦人とユダヤ人が共に祈るとき、神のすばらしい力が解き放たれるのです。イェシュアは、ふたりが心を一つにして私の名によって祈るなら、かなえてくださると語っているのです。

私はある時、年長のドイツ人のクリスチャンと共に祈る機会がありました。後で気づいたことですが、その日は偶然ホロコースト記念日でした。私たちは互いに手を取り合い、イスラエルのため、またドイツのために祈りました。祈っている間に、私たちの目から涙が互いの手の上に落ちたのです。その涙が混じり合った時に、神の心がどんなにか動かされたことでしょうか。父の心に結びつきましょう。失われた羊が帰ってくるように、どうか皆さん祈ってください。

成るように成る

大阪夜

ヨセフ・シュラム（ネティブヤ）

■預言の解釈（歴史観と未来観）

東京大会での
ヨセフ・シュラム師

預言の解釈法について、神学校ではほとんど教えてくれません。今日、教会の中では終わりの時代がどのようになるのかについて多くの議論があります。それは丁度、コーヒーを飲むときに、ミルクをいつ入れるのか、あるいは入れないのか、という議論に等しいのです。人々はそれぞれの嗜好と考えに基づいて、千年王国がいつ来るのかという問題でさまざまな教派を作ってしまいました。

歴史や未来の見方には、いくつかの方法があります。カルヴィンは、すべてのことが起こる前に既に決められていると考えました。ルターは、私たちが何かを起こさないと実現しないと考えました。つまり、私たちの選択が純粋に歴史を形作るというのです。イスラム教徒はすべてのものはアッラーから来ていると考え、私たちとは関係が無いと言っています。イスラエルはどうかというと、何が起ころうと気にしません。

それでは聖書は歴史と未来に関してどう語っているかと言えば、これらすべてのことが組み合わさっていると教えます。申命記 30 章には、「いのちと死……を、……置く。あなたはいのちを選びなさい。」とあります。夏に食物を刈り入れないと冬に食べ物が無くなるように、聖書は将来私たちが直面することに対して準備しないといけないと教えています。私たちは神が定めておられることを遅らせることも、早めることもできるのです。

■ユダヤ教とキリスト教の共通点

マタイ 6 章 34 節には「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります」とあります。「あすのことはあすが心配します」をイェシュアはヘブライ語で「ダヤー・ツァラー・レシャ・アター」と言ったと思われます。そして、このイェシュアの言葉をタルムードというユダヤ文献でラビが後に引用しているのです。

神は天地創造の前から、この世界についての計画をあらかじめ立てられました。そしてユダヤ人たちはキリストが戻って来ることを知っています。それは祈祷書の中で「あなたがシオンの丘に恵みと共に戻って来られることを、この目で見られますように」と、いつも祈っているからです。「戻って来る」ということは、かつて神がシオンの丘にいたことを意味します。しかし正統派のユダヤ人は、それはシェキナー（神の臨在）が神殿の丘に帰ってくると主張して、メシアが戻ることを否定します。しかし、その同じ祈祷書には同じ表現でメシアのことが書かれているのです。つまりユダヤ教の終末論は新約聖書の考え方と非常によく似ているのです。

■共通の終末論

どのような千年王国観でも、また再臨がいつ起こったとしても、イェシュアはオリーブ山から天に上げられたように、戻って来られます。ユダヤ教もキリスト教も、最後の裁きがあることを知っています。信じるものは救われ、信仰の無い人は永遠の刑罰を受けること、またその前にイェシュアが戻って来られ、私たちが空中で会うこと、またその後に千年王国という平和がくること、また死人の復活があり、人が永遠の喜びと幸福のため、また永遠の患難のためによみがえることは、ユダヤ教徒でもキリスト教徒でも理解しているのです。しかし、これ以外の推測に目を向けることは分裂を招きます。教会は再臨のための備えをしなければなりません。世界の贖いの鍵は、イスラエルであることをよく知る必要があるのです。

■再臨への備え

多くのクリスチャンが、サムソンのような考え方に陥っています。サムソンは生まれる前から、自分は神から選ばれた者であることを知っていました。しかし彼は「なぜ戦わないといけないのか」「もう将来は決まっているから、闘いじゃなく愛だけが必要だ」と思うようになりました。サムソンはペリシテ人と戦うために召されていたのに、この世の喜びのために真実を見失っていたのです。しかし、神はどのような状態でもご自分の目的を達成されます。個人や教会をイェシュアの再臨のために用いられるのです。大切なことは、再臨の時、私たちはそれを喜んで迎えるのか、それとも代価を払わなければならないのかという問題です。再臨の備えをしないで、世の楽しみのために自分を浪費してはいけません。再臨に備えるには、次の4つのことが重要です。

1. つながりを作る
   できる限り広く、世界のビリーバーとのつながりを作ることです。今回、日本と韓国が共同でフォーラムを開催できたことを嬉しく思います。
2. 啓示（神とのコミュニケーション）
   神とのコミュニケーションである啓示も大切です。そのためには、聖書の建設的な知識を蓄えることが必要です。教会は、聖書の御言葉を語るところに戻らなければなりません。
3. 犠牲
   イェシュアのために代価を払うことが、その人が弟子であることを証明します。イェシュアのために死ななければ、イェシュアのために生きることはできません。代価をいくら払えるかによって、人の忠実さがわかります。
4. 毎日主を宣べ伝えること
   アラブには「どの様な日でも、友人を作り、新しいことをしなければ、その日は無駄になった」ということわざがあります。私はこれをもじって次のように言います。「私の主よ、早く来てくださいと言わなければ、また、信仰を伝えなければ、その日は無駄になったのだ」と。

イェシュアは疲れた花嫁のためにではなく、活力に溢れた花嫁のために戻って来ます。結婚式の前にきちんと備えをしない花嫁はいません。教会も同じことです。主よ、シオンの丘にどうぞ早く帰って来てください。ユダヤ人や世界の人々に、主ご自身を啓示してください。

霊の津波を待ち望む　仙台祈りの時レポート

■日本のイスラエルへの祈りの原点

中田重治師が一般信徒に初めてイスラエルのために祈るように教えたのが、岩手県東松島市の野蒜（のびる）海岸でした。そして、この海岸を今年３月11日に津波が襲ったのです。そこで、犠牲者のために、日本とイスラエルでのリバイバルのために、イスラエルからの講師全員と関係者が現地を訪れ、祈りの時を持つ事にしたのです。

■現地への道

仙台空港に着陸する前から、機中からまだ生々しい津波の跡が見られました。空港にはご自身も津波の被害にあわれた聖協団宮城聖書教会の田中時雄師と何名かの参加希望者が待っておられ、一緒に野蒜海岸に向かいました。

まだ復旧していないJR仙石線の野蒜駅が野蒜海岸のすぐ近くにあるのですが、駅舎や近くの商店も大きな被害を受けて壊れたままでした。この地域はがれきは片づけられているだけで、住民の姿は見られません。後でお聞きしたところ、この地域の住民の約1/3が津波で亡くなられたそうです。

ここで残りの参加希望者と、お会いする事が出来ました。多賀城市のご家族とそのお友達、そして八王子から来られた中田重治師の直弟子の息子さんご夫妻と関係者も合わせて22名が、海岸に向かいました。

田中師の「中田重治師がイスラエルのために祈るよう教えられたのはこの海岸です。」と言う言葉を聞いて防波堤に立つと、当時と変わらない光景に胸をうたれます。ここで祈りの時を持ちました。

■ヨセフ・シュラム師

今回の災害で、私たちは神の力を思い知りました。私たちは神の前には地上をはいまわるアリのようなものです。すべての人が神を知り、礼拝しなければなりません。この災害を通してクリスチャンが一つになれますように。そして中田重治師の説かれたメッセージがよみがえり、日本とイスラエルに救いをもたらしますように。破壊の力では無く、愛の力を注いで下さいますように。

■ピーター・ツカヒラ師

このような大きな災害の被災地を訪問すると心を動かされます。しかし、ユダヤ人も苦しい経験を経てきました。ホロコーストで数百万人を失ってもユダヤ人が存続している事は、神が死の中から命を起こす事ができる方であることを示しています。中田重治師による祈りの運動の結果、死からよみがえったメシアニック・ジューの人々と共に、今この海岸に立っています。また、神がこの痛みをこの民族を変えるために用いる事ができる方であることの証拠でもあります。日本のトランスフォーメーションのために祈ります。自然の波の後には霊の波が来ます。解き放たれた恵の津波は日本全土をおおい、教会だけでなく社会全体を変えます。日本がイェシュアの王国になり、みこころが地上に行われますように。

■田中時雄師

私たちは何人かの教会員を失い、困難な状況にありますが、前に進んでいく力をあたえてください。津波の後、走り続けてきて疲れを覚えている時に、私たちの祈りの成果であるメシアニック・ジューの兄弟を送り、励まして下さった事を感謝します。彼らを、そして日本民族を再臨のために用いてください。日本のクリスチャンが、メシアニック・ジューが再臨と直結する存在である事を知る事ができますように。これらの人々がここに集ってくださった事を感謝します。

■イ・ジェハ師（ソウル大会共同準備委員長）

日本に中田重治師とその弟子たちがおこされ、その現場に立つきことができて、言うべき言葉が見つかりません。神はかつてシナイ山に立たれたように、今日本に立っておられます。私たちは少人数ですが、目には見えない主の万軍が今私たちの周りに立っており、この海岸から日本にリバイバルがおこります。あなたの栄光と力がそそがれますように。

■エイタン・シシコフ師

ショファーを吹きならす
シシコフ師

皆さんと共に立って、心からへりくだります。私たちイスラエルのメシアニック・ジューは皆さんと共に立っています。再臨の日まで、ひとつになって働きましょう。これからショファーを吹きならそうと思います。この音色はまず、勝利を宣言し、死から生、涙から喜びへのブレークスルーをもたらすものです。そして、人々を集める時にも鳴らされます。今、私たちはここで一つにされているのです。もう１つの意味で、もっとも私が強調したいのは、ヨベルの年です。「ヨベル」はショファーの別名でもあり、全ての負債が無くなる贖いを意味します。この地には贖いが必要です。神の霊が回復をもたらしてくださいますように。神がこの民族をみもとに引き寄せてくださいますように。イェシュアよ来てください！

■被災地を訪れて

祈りの時を終えて外部の参加者と別れ、石巻市の日和山公園に向かいました。ここは海岸を見下ろす高台で、震災の直後にはここから撮影された津波のおそってくる映像が何度もニュースで放映されたところです。震災から８カ月以上たっているのですが、市街地はがれきが片付けられているだけで、巨大ながれきの山も見られました。

最後に、田中師の教会を訪問しました。田中師ご夫妻が、津波で二階にとじこめられたところです。私たちが訪問する前日にやっと修復工事が終わったとの事で、会堂はきれいになっていました。近辺の住民も多くが去ってしまったようですが、生涯この教会を守って行きたいとの事でした。この教会の安全と発展のために祈り、仙台駅に向かいました。

少人数の祈りではありましたが、この祈りがイスラエルと日本、全世界を変えて行く事を祈りたいと思います。

和解について

東京１日目夜

尾山　令仁（聖書キリスト教会）

1956 年の夏、デボーションの際にマタイ 5:23-24 を読んでいた時、兄弟との和解は神を礼拝することよりも優先すると教えられた。日本人はアジアの人々に謝罪をすべきだと気付いたが、当時はビザが無ければどこへも行けなかった。現地の誰かに招いてもらわないと訪問することさえできない。そして、韓国の大学の先生に招いていただき、やっと韓国を訪問できたのは 1963 年だった。

そして、スウォンにあるチェアムリで起きた残虐事件を知った。日本の巡査が殺されたことに対する報復として、日本の警察がそこの教会に成人を集めて焼き殺したという。半数はクリスチャンだった。

私たちが人々に謝罪しても、誰も相手にしてくれなかったが、祈っているとこの教会を謝罪の象徴として再建するように示された。そして、1969 年に一千万円を持って韓国を訪問した。しかし、相手は遺族会を結成し、日本人には教会を再建させないと言う。交渉は難航し、大変な目にあったが、1年後に人々が態度を変え、本当に和解できた。箴言 16:7 にあるように、御心に従えば主は敵とも和解させて下さる。

日本人として、私たちはアジアの人々への謝罪が必要だが、それと同時にクリスチャンとしてユダヤ人にも謝罪しなければならない。西欧では二千年にわたり、あらゆる口実でユダヤ人に対する激しい迫害と虐殺があったが、それは教会史には何も書かれていない。ちょうど、日本の教科書にアジアでの残虐行為が、ほとんど書かれていないのと同じだ。

イエスを十字架につけたのはユダヤ人だと言って、クリスチャンはユダヤ人を殺した。しかし、ユダヤ人と共に、我々の一人一人もイエス様を十字架につけのである。これがわからないと、十字架の救いがわかったとは言えない。

また、ユダヤ人の中でクリスチャンになった人々が、まだユダヤの風習をやめないと、異端審問にかけて激しい拷問を加えたことも忘れてはならない。

ローマ 15:27 によれば、我々はユダヤ人が与えてくれた霊的な祝福に感謝し、物質的なものでお返しをすべきなのに、逆にユダヤ人を苦しめて来たのだ。

現在、イエスを信じた人々（メシアニック・ジュー）の多くは、人の伝道ではなく聖霊の直接啓示を受けて信じている。これから重要なのは、クリスチャンが愛を実際の行動で示すことである。心から彼らに謝罪し、尽くす必要があるのだ。

しかし、クリスチャンたちは多くの教派に分かれて互いに和解と一致ができていない。聖霊派と福音派が対立し、聖書信仰の人々とリベラルの人々も対立している。そうではなく、クリスチャンが互いに協力し、愛し合う時に、人々がキリストの教えに魅力を感じるだろう。

韓国の人々に対して犯した私たちの罪が赦され、クリスチャンがユダヤ人に犯した罪が赦されますように。

再臨について

東京３日目午後

奥山　実（宣教師訓練センター）

ツカヒラ師は、使徒 1:6-8 から語られたが、私もそこから始めたい。弟子たちは、信じていたイエス様が十字架で死なれたのでがっかりしていたが、復活がわかり「イエスはメシアだ」と喜んだ。そして、イスラエルが世界を支配する時が来たと考え「国を復興されるのはいつですか」と聞いた。

しかし、イエスは「いつ、どんな場合か、あなたがたは知らなくてもいい」と言い、世界宣教を進めるよう命じられた。イスラエルの望みが実現するのは、世界宣教の後だ。

「ユダヤ人はイスラエルが中心になって世界を治めると考えていたが、それは間違っていた。だから神様は教会を新しいイスラエルにされた」と教会は考えて来た。これが「置換神学」だ。しかし、これは間違っている。世界宣教が完了すると、イスラエルの国が復興されると、イエス様は言っておられる。マタイ 24:14 も同じ意味だ。

ここで、福音が「世界に宣べ伝えられる」ことが条件であって「世界中が悔い改める」のが条件ではない。つまり、伝道は種まきだけでも意味がある。収穫は難しいが、とにかく伝えるだけなら誰にでもできる。あらゆる手段を使って福音を伝えればいい。そして救われる人が現れたら、弟子にすればいいのだ。

ただし、どこまでやれば「伝えた」ことになるのかは、なかなか難しい問題だ。1回聞いたら、伝えたことになるのか、一対一で迫らないといけないのか。それは主がお決めになるのであって、我々はベストを尽くせばいいと私は考えている。

もう一つ重要な事は、マタイ 10:23 で弟子を遣わす際に、人の子が来る時までにイスラエルの町々をめぐり尽くせないと主は言っておられる。地上の全ての人々に福音を伝えたら主が来られるのだが、我々が「まだ足りない」と考えて働いている最中に、主が来られて「それまで」と言われる。だから、私たちが配る1枚1枚のトラクトが、再臨の主を呼んでいる。

IIペテロ 3:11-12 によれば、私たちは再臨を待ち望み、また、福音宣教で再臨を早めるべきなのだ。サンパウロではジーザスマーチに 200 万人、500 万人が集まっている。また、フィリピンには 700 万人の教会が現れている。我々も失望していないで、手を尽くして伝道するべきである。

Iテサロニケ 4:16-17 には、ラッパの音と共に我々が復活の体に変えられて、そして天に上げられると書かれている。そして、義人がいなくなった地上に裁きが下される。中田重治師もこの終末論だったが、私もそれを信じる。終末論には様々な意見がある。メシアニック・ジューも独自の終末論を持っているそうだ。どちらが正しいかではなく、それぞれ確信を持つことが重要だ。

しかし、誰もが同意できることがある。終末の後に来るのは新天新地であり、それは「ハッピーエンド」なのだ。我々は「世々限りなく支配する」ことになる。神の恵みはすごい。

AMFソウルツアーに参加して

近藤　宏子

シンガポールに引き継がれたAMFの旗

2年前大阪で開催されたアジア・メシアニック・フォーラム（AMF）に参加して、集会の最後にイスラエルから迎えた先生たち、日本の教会や団体のリーダーたち、そして私たち信徒が立ち上がり、イェシュアの御名によって祈りを捧げた時、会場全体が主のご臨在に包まれました。今回はソウルでも開催されると聞いて参加ツアーに申し込みました。

■祝福に包まれたソウル大会

11月24日正午ごろ到着。バスで会場に着くとすぐに集会の始まりです。「One New Man 新しいひとりの人」という大きなテーマで、24日は「預言の成就とユダヤ人の帰還」、25日は「新しいひとりの人・ユダヤ人と異邦人のパートナーシップ」、最終日の26日は「神の御国とイスラエルの帰還」とそれぞれテーマが設けられていました。

開会冒頭、尾山令仁師がマタイ5章23節よりスピーチをされました。続いてピーター・ツカヒラ師は「イスラエルの預言的意義」と題して預言と啓示という視点から語られました。その後の韓国の牧師からのメッセージは、異邦人から見たユダヤ人の特徴を述べるという内容で、少し違和感を覚えました。1日目の最後はエイタン・シシコフ師で、ヨエル書2章28節から「あなたがたの息子、娘は預言をする」と題したメッセージをされました。

第2日目は午前10時から始まりアキバ・コーヘン師が、マタイ1章1-16節からダビデの家の興亡と回復について「マタイの福音書と新しいひとりの人」という題で語られました。次に、次回（2013年）のAMF開催国であるシンガポールのギルバート・カルディゲス師がビジョンを謙虚に熱く語られました。

午後はパネル・ディスカッションが開かれ、熱のこもった討論が行われ傾聴に値するものでした。この日の最後はヨセフ・シュラム師。師は第二列王紀7章から、皮膚病を患う4人が敵アラムの陣営に入った時、敵が残したものを自分たちだけの分捕りものとせず「良い知らせ」を王の家に知らせるストーリーをとおして、「もし私が自分だけのためにあるなら、私は何者なのか（If I am for myself, who am I?）」と締めくくられました。私たち会衆にも決意を促すような迫力あるメッセージでした。

第3日目は、合同祈祷会で、メッセージとメッセージとの間に熱い祈りの時が持たれました。最初に行澤一人師が「ユダヤ人との分離を悔い改める」メッセージをされ、次にエイタン・シシコフ師が「異邦人との和解を宣言するメッセージ」を語られました。

午後からは韓国の牧師の方々による「アジアの一致を宣言する」メッセージ。アジア諸国のプレゼンテーションが行われました。インドのゴアから参加なさったアンドリュー師は「エルサレム城壁の見張り人」というミニストリーの代表で、イスラエルからやってきてドラッグなどに走るユダヤ人青年たちに重荷を持っておられました。

終わりのメッセージはシュラム師で、エゼキエル17章22節から「ダビデの幕屋の復興」と題して語られました。そして参加者一同で聖餐式の恵みにあずかりました。

■「旗」はシンガポールへ

最後にロマ書11章全体を朗読しAMF2011共同宣言としました。大きな拍手の中でAMFの大会旗が韓国からシンガポールのギルバート師に渡された時は、大きな感動を覚えました。神さまはご自身の選びの民であるイスラエルの救いと回復のために必要な時と器を用意され、着々とご計画を進めておられることがよくわかる集会でした。

フォーラムの合間に、会場の入り口でアクセサリーショップをやっていた女性と数回話す機会がありました。「韓国は日本よりもクリスチャンの数は多いけれど、イスラエルのために祈るクリスチャンは少ないので、どうか祈ってほしい」と彼女は言いました。この問題は日本も同じです。聖書の視点からイスラエルの救いと回復のために祈るクリスチャンが韓国にも日本にも多く起こされるように祈り続けようと二人で話しました。

■大会後の交わり

ヨイド純福音教会の礼拝

27日の日曜日はヨイド純福音教会の礼拝に出席。メガ・チャーチに圧倒されました。午後からはスウォン市の韓国民族村を見学。李氏朝鮮時代の家屋など建物が多く立ち並び、韓国の生活様式がよくわかるように作られているテーマパークです。

28日最終日の見学で深く心に残ったのは、ヤンファジン外国人宣教師墓地でした。ここには朝鮮民族のため一生を捧げた外国人宣教師とその家族145人が葬られています。その中に、曾田嘉伊智（そだ・かいち）という日本人の社会事業家の名前がありました。韓国のために尽くした宣教師たちへの感謝と敬意にあふれたこの墓地を歩きながら「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」という聖句を思いました。

このツアーで東京・名古屋方面から参加の兄弟姉妹たちと楽しい交わりを与えられました。これを企画して下さったシオンとの架け橋の皆様に感謝いたします。

神さまの聖名をほめたたえます。

東京大会ユースセッションレポート

前の東京大会で、エイタン・シシコフ師とその場に居合わせたユースたちの小さな集いがもたれました。そして、シシコフ師と参加者の希望により、今回は公式にユースセッションを行う事になったのです。国民の祝日に開催する事が出来、エイタン・シシコフ師の他、五十嵐義隆師とシシコフ師の息子さんであるアビ・シシコフさんを加え、祝福された時となったユースセッションをレポートします。

■アビ・シシコフさんのメッセージ

イスラエルの若い人たちは、自分のアイデンティティーをあまり理解していません。祖国を追われたユダヤ人にとって律法を守ることがアイデンティティーでしたが、現在は宗教的な人しか律法を守っていません。しかし、私たちは神の子というアイデンティティーがあります。このアイデンティティーは各自が見つけなければいけません。イェシュアによって霊的に生まれ変わることで、神の子というアイデンティティーを得ます。イスラエルの若者に、これが分かるように祈ってください。

イスラエルでは、30 歳以下のビリーバーの大半が第二世代になっています。第二世代には利点もありますが、イェシュアを信じ続けるのが大変です。ビリーバーの家庭に生まれても、自分の信仰を持ち、自分にあたえられている召命を理解して、家族としての召命とバランスを取る必要があります。世代や個人によって役割が違う事を、理解し合うべきなのです。兵役の後、アメリカで神中心に生きることを示され、その後神がどれだけ私を愛してくださっているかがわかりました。神はわたしたちが人生で犯すすべての罪を十字架によって赦してくださるので、神に心から従うことが重要なのです。私たちが生きているのではなく、メシアであるイェシュアが私たちを通して生きておられます。イスラエルでも、日本でも若者が感謝を持って心から神に従えるように祈ってください。

イスラエル人は兵役によって大きな影響を受けます。規律や時間を守るなどのことを身に着けることができますが、霊的には苦しい時間です。周囲にビリーバーがいない状況で神の愛や恵みに従えるよう祈って下さい。

若者がアイデンティティーを得られるように、世界中の特にイスラエルに住む私の世代が演技ではなく、心から神につき従うことができるように、これからも祈って下さい。

■若者たちの世代へ

大田　喜生

僕がワーシップの奉仕をさせていただいたユースセッションは、本当に素晴らしいものでした！！ 2 年前のAMF 2009 のユースの集いとは何かが大きく違いました。もちろん会場やスケールなども 2 年前とはちがいましたが、それ以上に霊的に何か大きなトランスフォーメーションが起きたと感じました。

また日本の若者達がイスラエルのために祈ることの重要性を学び、またモーセの使命をヨシュアが継いだように、私たちが前の世代の使命を継いで日本を変えて行き、ヨシュアのように約束の地へ入ることを学んだ集会だったと思います。

集会の最初に行われたワーシップの時間は、本当にイエス様の臨在が深くあり、言葉では表せないほど素晴らしいものでした！ また後半のイカピー（五十嵐義隆）師のメッセージも本当に素晴らしいものでした。イカピー師は 2 つのポイントについて、話してくださいました。

1. ローマ書 11 章にあるように、神様のイスラエルに対する賜物と召しは変わらない。それと同じように私たちに対する召しも賜物も変わらないので、自分たちの賜物と召しを理解し、神様にあって忠実に賜物を使い、召しに生きよう。
2. イスラエルのためにどう祈るかという点で、日本人として入って行ける領域がある。イスラエルを敵視する隣人を愛しながら宣教ができるように祈る。また、ユダヤ人に妬みを起こさせる為に日本のリバイバルを祈る。とにかく祈りと御言葉に忠実になって、神の国が完成する為にイエス様をひたすらに礼拝しながら御言葉を実践して行こう。そうすれば、おのずとそれぞれに与えられている賜物と召しが解き放たれていく。

また、2 日目の午後の分科会でのエイタン・シシコフ師とアビ・シシコフさんのメッセージも、本当に素晴らしいものでした。彼らは親子漫才のようなおもしろい話をしてくださり、マラキ書の最後の「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる」ことを、彼ら自身の体験から話されました。

彼らを見ていたら、僕達とイエス様の関係が見えてきました。お互いに理解し合い尊敬し合っている事、また本当の和解が感じられました。エイタン師は父の立場から、アビさんは息子の立場から話してくださり、エイタン師からは、聖書の中にある放蕩息子の例えに出てくる父の心が感じられました。忍耐を持ち、また十字架の愛で愛するという心です。

父と子の関係が非常に壊れている今の時代に、このエイタン師とアビさんのメッセージは日本の若者達にとって大変意味あるものだったと思います。日本の若者達が父の愛すなわち十字架の上で示された愛に触れられ、彼らの人生が変わっていくことが感じられました。

今回のセッションは大変祝福された、アメイジングなものでした！ 日本の若者達が前の世代を継ぎ日本の歴史、文化をイエス様の栄光のために変えていくために立ち上がる、目覚めの時がきたと感じています！！

恵みの天幕国際聖会
バル・ハバ 2012 のご案内

2012 年 3 月に、「バル・ハバ」（マタイ 23:39）をテーマに国際聖会が開催されます。ぜひご参加ください。

日程：　2012 年 3 月 7 日ー 15 日
費用：　1259 米ドル
主催：　恵みの天幕・リバイブイスラエル
　　ティックンミニストリー

※現地までの航空券等は各自の手配となります。
※英語で開催され、日本語への通訳は予定していません。
詳細な情報や申込は、www.tents-of.mercy.org から

アビ・シシコフさんの日本滞在

大阪大会での
アビ・シシコフさん

アビ・シシコフさんはアジア・メシアニック・フォーラム2011の約一か月前に来日し、非常にハードなスケジュールを精力的にこなしました。彼にとっても、日本の若いビリーバーにとっても、とても良い時間になったようです。日本のクリスチャンの若者との交流は彼も力を入れていただけに、実りあるものとなりました。

７つの教会を訪問し、数多くのミーティングをこなしたのです。彼自身、自分のコングリゲーションでは牧師と呼ばれる立場ではないため、日本でも一方的に教えるよりも話し合いに重点を置きました。午後４時に終了予定だった会が伸びて、終わったのが７時半だったこともあります。行った教会ごとに友達を作り、食事に行ったり、音楽を一緒にしたり、楽しい時間を過ごしていました。日本の若いクリスチャンたちを見て、力と神の恵みに満ち溢れていると喜んでいました。また、何人ものユースリーダーが、メシアニック・ジューが身近になり、意識が変わったと語ってくれました。

シオンとの架け橋が作った「イスラエルの歌」は、彼も歌える歌が多くて交流に一役買ったようです。また、彼自身の友達を作ることと共に力を入れていたのが、日本人同士を友達にすることでした。彼が行った教会で友達になった人をシオンとの架け橋の活動 (アジア・メシアニック・フォーラムのプレイベントや本大会など) に誘い、別の教会で知り合った人に紹介していました。そのようにして、日本の中で若者の輪が広がり、一つになることを切望していました。

そして、日本では今まで聞くことのできなかった、イスラエルにいる若いメシアニック・ジューの状況を教えてくれました。特に、兵役の体験やその中での苦悩は初めて聞くものでした。日本でもイスラエルほどではないにしろ、クリスチャンが少なく、学校などでも難しい立場に立っている若者たちにとってとても良い励ましになったと思います。彼と、彼の父親であるエイタン・シシコフ先生がされた放蕩息子の話は彼らの体験を通して、より身近なものになったと思います。新しいイスラエルのために祈るポイントを具体的に教えられました。それを祈っていくのがこれからの課題です。

原爆ドームの前で

また、教会訪問以外にも日本の文化や歴史にも触れました。イスラエルより東に来るのは初めてで、何もかもが初体験という中で、とても楽しんでいるようでした。原爆ドームでは彼自身アメリカの国籍を持っているということもあり、非常に心を痛めていましたし、姫路城に行ったときは、修理工事の風景を見たのですが、日本人の古いものを美しく、新しいもののように残していくという心意気に感動していたようでした。歌舞伎や相撲などにも興味を示し、好奇心がとても強い人なのだなと思いました。

アビ君自身、また日本に来たいし、日本のクリスチャンの若者もイスラエルに来てメシアニックジューを見てほしいと言っていました。今回の彼の日本滞在を機に、さらに多くのメシアニックジューの若者と日本のクリスチャンのユースの交流が活発になり、神の御国の完成というゴールに向かって、次世代の人たちが共に働いていけるようにこれからもお祈りいただきたいと思います。

（随行スタッフ）

■アビ・シシコフさんからの感謝の手紙。

日本の兄弟姉妹の皆さんへ。

日本に滞在していた間、とても祝福された時間を過ごせたことを本当に感謝しています。日本にいた約一か月間に多くの都市にある教会に行き、いろいろな人に会うことができました。また、出会った人から愛を受け、祝福されました。今回の経験は、わたしの人生に大きな影響を与えるでしょう。

そして、教会の皆さんがイスラエル、特にメシアニックジューをどれほど愛してくださっているかを知ることができてとてもうれしいです。日本人の優しさや寛大さに圧倒された旅でもありました。今回、神によって私が日本に遣わされたのは、イスラエルを愛してくださる日本のクリスチャンの皆さんと関係を築き、それを持続させることだと思っています。同じ世代の若者たちと友達になれたことは非常に特別なことですし、この関係は神の計画の成就のためにこれからも続いていくでしょう。

若者たちとともに歌でイェシュアを賛美できたことはかけがえのない経験でしたし、メシアニック・ジューの賛美歌が、ユダヤ人ビリーバーと日本のビリーバーの間にたくさんの関係を作りました。神がこれからもすべての言語やスタイルで彼を賛美する歌を作らせてくださるよう祈っています。

神が私の人生を変えてくださっている経験を皆さんと共有できたのはとても光栄なことでした。特に日本では、イスラエルや諸民族に対する神の計画について多くのことを学べました。また、神に偉大な目的の中で担う自分の人生の役割についてより深く理解できたのは非常に良かったです。神が私を作ってくださったのですから、私が生き方を選んだわけではありませんし、神によって定められた役割があると思うので、彼が望んでいることを成し遂げようと思っています。

皆さんが神とイスラエル、そしてイスラエルのメシアニックジューの若者として訪問した私にくださった力や時間、献金や献身に深く感謝します。また近いうちに日本に来て、全世界における神の王国を完成させるために働きたいと思っています。神が皆さんを大いに祝福し、さらなる神の恵みがあるように祈っています。

イェシュアの愛が皆さんの上にありますように。

アビ・シシコフ

ベツレヘムのパレスチナ人ビリーバー

イスラエル訪問レポート

シオンとの架け橋は、イスラエルにかかわる働きをしている以上、パレスチナ人のビリーバーやイスラエル国内のアラブ人ビリーバーの状況を理解する事は不可欠であると考え、彼らとの交流を始めています。最近の交流でわかってきた彼らの状況について、お知らせしたいと思います。

ベツレヘムの分離壁

ベツレヘムには、高い「分離壁」が立っています。地域を完全に分離するために、分離壁は街の中にまで入り込んでおり、イスラエル人を守るためにやむを得ないと知っている私たちも、強い威圧感を感じます。ベツレヘムはもともとアラブ人クリスチャンの街でしたが、イスラム教の圧力から多くのクリスチャンが街を離れイスラム化が進んでいます。

ベツレヘムなどパレスチナ自治区に住むパレスチナ人は、病気治療等の特定の理由を除いて、簡単にイスラエルに入る事は出来ず、分離壁に「閉じ込められた」生活を送っています。

パレスチナ人の大部分はイスラム教徒で、イスラム教では誰かがキリスト教に改宗した場合、改宗した人と伝道した人の両方を殺すのが正しい対応とされています。現在この規定が厳格に守られているわけではありませんが、実際に殺害された人や、殺害されることを避けるために信者を海外に逃がしたと言う話も聞きました。

ベツレヘムにはまだある程度のクリスチャンも残っていますが、その大部分はカトリックやギリシャ正教の伝統的なクリスチャンです。そして、かつてのキリスト教の歴史のように、福音派のクリスチャンは伝統的なクリスチャンからも迫害を受けています。彼らは正教系クリスチャンにも伝道しており、成功するとこのような問題が起こるのです。

さらに彼らを厳しい状態に追い込んでいるのが、世界中のイスラエルを愛するクリスチャンです。そのホームページにはイスラエルの国旗がデザインされ、イスラエルと共に立つ事をすすめるメッセージが掲載されています。この中には「パレスチナ人の存在が再臨を遅らせている」と言うような誤ったメッセージまで含まれており、これを見たパレスチナ人は、福音派のクリスチャンはイスラエルに味方する自分たちの敵だ考えるのです。

このような状況から、パレスチナの福音派クリスチャンの大部分は置換神学的な立場をとっています。イエス・キリストを信じているだけでも同族への裏切りであるのに、イスラエルの選びを認め、国家の存在を支持する事は二重の裏切りであり、「自殺行為」になるからです。

焼き討ちを避けるため
窓が無いコーリー師の教会

このような状況のベツレヘムで、イスラエルにカナンの地を約束したアブラハム契約は今も有効だと主張している人々がいます。ベツレヘムとエルサレムに教会をもつコーリー親子です。その主張の結果ベツレヘムの彼らの教会は何度も焼き討ちにあい、東エルサレムの教会は貸主に圧力がかかって何度も移転を繰り返しています。お父さんのナイム・コーリー師は、「最強のガードマンである神が守っているから生きていられる」と話してくれました。

パレスチナ人の福音派クリスチャンとイスラエルのメシアニック・ジューは、共に同族から「裏切り者」と考えられている点で、似た矛盾に苦しめられています。クリスチャンによるイスラエル支援は、その多くがメシアニック・ジューを迫害する正統派ユダヤ人の手に渡ります。それと同様、クリスチャンが行うパレスチナ支援もまた、その大部分が福音派クリスチャンを迫害する人々の手に渡るのです。互いに苦しい状況にあるパレスチナ人クリスチャンとメシアニック・ジューに、キリストにある真の和解が実現し、共に同族が福音に導かれるように働く時が来る事を祈りたいと思います。

来年に２月には、上記のナイム・コーリー師夫妻が来日されます。ぜひセミナーにご参加ください。(P1 に案内)

キブン活動停止のお知らせ

シオンとの架け橋の活動開始直後より支援窓口を続けてきた「キブン」が 2011 年末をもって活動を停止する、との知らせが、ツビ・サダン博士から入りました。ヘブライ語のメシアニック雑誌として影響力のあったキブン誌が廃刊になるのは残念ですが、最近では他にも同様の雑誌が発行されるようになったので、当初の使命を果たしたとも言えるでしょう。この貴重な働きへの皆様に支援に感謝いたします。

博士からは「財政的困難から発行が続けられなくなりました。これから仕事を探さなければなりませんが、これは簡単な事ではありません。どうぞ私たちのためにお祈り下さい。長い間の支援に感謝します」という趣旨のメッセージをいただきました。なお、サダン博士は著書『メシアの百の名前』の出版など、今後も個人として活動されるとの事です。

シオンとの架け橋事務局

〒 650-0027　神戸市中央区中町通 2-2-18　平戸ビル 4F
TEL　(078) 341-7501　FAX　(078) 341-7502
e-mail : news@zion-jpn.or.jp　Homepage : www.zion-jpn.or.jp

献金受入口座　郵便振替 00930-5-241773「シオンとの架け橋」

1. ネティブヤ、オハレー・ラハミーム、マオズ・イスラエル、ピーター・ツカヒラ師、カスパリセンターへの献金と明記されている場合は、全額を宛先の団体に送金させていただきます。
2. 「イスラエルのメシアニック・ジューのために」と指定の献金は、全額をイスラエルのメシアニック関連団体に献金させていただきます。おもに 1. 以外の団体に、配分します。
3. 上記以外の特定の目的や団体のための献金をご希望の場合は、ご連絡ください。可能な範囲で、対応させていただきます。
4. シオンとの架け橋のための献金、およびご指定の無い献金は、イスラエル回復のための国内外でシオンとの架け橋の働きや、その他の働きにあてさせていただきます。

※シオンとの架け橋は、聖書研究会が運営する超教派ミニストリーです。